

北総の子安像塔の系譜Ⅱ江戸時代中期におけるその出現と成立について

蕨 由美

はじめに

北総、特に印旛沼周辺の石造物を調べていて、庚申塔と並んでその数の多さが目立つのは、「子安像塔」、すなわち幼児を抱いた観音（女神）像の浮彫された石塔群である。特に、筆者の住む八千代市とその近接した地域では、寺院や神社の境内、かつて仏堂だった地区集会所などに、子安像塔が建ち並ぶ風景を目にすることがある。その多くは近世末から近代にかけての石塔で、祠の中に大切に祀られているものもあれば、雨風にさらされ崩壊寸前の姿のもの、また今も続く子安講が建てた真新しい塔もある。

北総の子安塔について先行する調査研究では、平岩毅氏が当会「会報」24号*1でその概要に触れられ、また榎本正三氏の印西市を中心とした女人信仰研究の著書*2や論文*3があるが、当時は『千葉県石造物文化財調査報告書』のほか北総全体の石造物データが不十分で、子安像の初出とその系譜を把握するに至っていない。

筆者は、八千代市の高津や大和田新田の民俗、特に女人信仰について調べる過程で、子安塔に刻まれた子を抱く像の淵源を知りたいと思い、範囲を八千代市周辺から北総全体に広げ調査を行ってきた。幸い最近では、各市町村教育委員会や地域の研究会

および当会の石造物悉皆調査の報告がある程度出そろってきたので、そのデータから抽出した八百件以上の子安像塔の約半数以上を实見し、特に江戸中期までの子安塔については未報告のものも含め、文化年間以前（一八〇三年以前）の約九十基の像容を把握することができた。

「子安さま」「子安観音」「子安大明神」「子育て観音」とよび名はさまざまであるが、母性を明らかにした主尊が子を抱く子安像の特徴ある像容は、仏教による儀軌にはなく、江戸時代の地域の女人信仰が月待講から子安講へ移行する過程で、講に集う女性たちの発意と、依頼された石工の着想と技で創造されたと思われる。

子安塔が濃密に分布する北総において、子安像塔の像容成立にかかわる江戸時代中期（18世紀代）の事例を画像学的に分析し、その創造と成立、発展の系譜を明らかにしたいと思う。

なお、「子安像塔」の名称は田中右品氏の「近世下野の子安像塔」*4の「観音と子どもが一組になった像」の定義に準じた。

一、調査の方法

一般的に石造物調査では、子安信仰に関わる石造物を「子安塔」と称して、「子安大明神」「子安観音」「子安講」など「子安」

の文字銘のみが刻まれた石祠や石碑と、子抱き像を刻んだ石塔をともにその分類に入れている。また後者の子安像の像容のある石塔には、「十九夜講」など月待ち信仰の文字銘があるものがあり、その場合「子安塔」ではなく「月待塔」の分類に入れていることも多い。

今回の調査では、「子安像塔」すなわち、主尊の観音または女神像が子供と一体となった像容を持つ石造物を対象とし、その像容成立の淵源を探ることを目的とした。そのため子安信仰以外の目的の石塔でも子安像の像容のあるものは調査の対象とし、また子安信仰にかかわる石祠や石塔でも文字銘のみで像容のないものは分布と時代推移の数の把握にとどめた。

像容や銘文の把握は、デジタルカメラで撮影した画像をパソコン処理して行った。昨今の石塔の現状は、地衣類に覆われ、また江戸後期から近代にかけての石質の悪い石塔類は風化崩落が進み、銘文はもとより、肉眼ではその像容が抱き子なのか未敷蓮華や宝珠なのかの判断も難しいケースが多々あつて、報告用の資料に不適な写真も多い。そのため画像のコントラストを調整し、拡大したプリントを元に手書きでトレースした図1を作成した。

参考とした調査報告書などの資料は最後に記した。なお、ほぼ悉皆調査に近い報告に基づくデータと、当会会員などによる現在調査中の報告や情報提供いただいた事例などもあり、未だその母数の不確実な集計であることは、ご承知置きたいと思う。

また市町村名は、地域の歴史的な詳しい分布把握のため、平成四年（一九九一）四月当時の旧市町村名を使用した。（地図は図2、合併による平成22年四月の市町村名は、表2-1の注を参照のこと。）

なお江戸時代中期とは、筑波大学日本美術シソーラスの「時代

区分」江戸時代前期・中期・後期の三区分に準拠し、享保元年（一七一六）から享和三年（一八〇三）までとした。

二、北総の女人講に関わる石造物の分布とその時代的推移

北総は、庚申塔と並んで、女人講による月待塔や子安塔の数がたいへん多い地域である。八千代市東部や佐倉市西部、印旛村の寺院や仏堂跡の地区集会所などでは、十数基の十九夜塔や子安塔が立ち並ぶ風景を目にすることも多い。

悉皆調査データがそろっている十市町村の月待塔と子安像塔、そして子安神名などを刻んだ石祠を年代別に集計した、表1-1～表1-4に示した。

月待塔のほとんどが如意輪観音像の十九夜塔であり、その数は江戸時代17世紀後半から18世紀代にかけて五百基以上建てられているのに対して、子安像塔の数は一割にも満たず、今回このほかの市町村を含めて調査した結果を加えても18世紀末（寛政十二年）までで81基にとどまる。

子安像塔の建立数が月待塔の数を上回るのは、幕末以降である。近代になって爆発的に数が増えるが、その多くは、八千代市や印旛村とその周辺に限られることから、この要因はこの地域の各子安講が数年おきに連続して建立するイシタテの風習に由来するものと思われる。

一般に十九夜塔が多い利根川べりなどの地域から子安像塔が生み出されてくるといわれているが、むしろ月待塔が少ない酒々井町で18世紀末までに8件の建立があり、そのうち2件は18世紀前半で、これは千葉県内でも早い出現である。この傾向は、隣接する印旛村・成田市がそれに続くことから、子安像塔発祥の地域として酒々井町域が注目される。

以上のデータを踏まえながら、実際に調査把握できた子安像塔について次項で紹介する。

三、子安像塔の事例

調査した北総の子安像塔のうち、一八〇三年までの年号銘のある子安像塔92件全数のリストを表2-1に、そのうち約半数についてのトレース画を図2-1で示した。さらに子安像塔出現と像容成立にかかわる事例を、銘文の古い順に十五基紹介する。

(以下のゴシック体数字は表2-1・図1の子安像塔No.を示す)

1 野田市中里の正徳四年(一七一四)銘墓塔

野田市中里の満蔵寺霊園の大越家墓地にある舟型光背の完成度の高い美しい浮彫像。「秋倉妙香信女」と「秋露童女」の戒名が刻まれ、同時に亡くなった死者(母と娘か?)、供養の墓標石仏とみられる。正面を向き右手で丸々とした乳児を抱き授乳させている。左手はそのまま膝に下ろしたままで、二臂の如意輪観音像の名残をとどめる。



1 野田市中里の正徳4年墓塔

正徳四年(一七一四)銘は、北総では唯一、江戸時代前期に入る最も早い年号であるが、故人の没年である可能性もあり、建立はその数年後とも考えうる。

野田市は、江戸川べりの子安塔のない地域の一つであるが、野田市内にはこのほか船形下の今泉不動堂墓地に宝暦六年(一七五六)と天明二年(一七八二)の二つ年号のある上部の欠けた墓標仏とみられる子安像塔がある。

2

酒々井町尾上住吉神社の享保十八年(一七三三)銘「子安大明神」塔

他に類似例のない天女型の立像で、子は抱くというより、生まれたばかりの嬰兒をとりあげた姿のようである。(右の写真の右側)

尾上の集落から離れた山林内の神社境内の尾根伝いの先に祠があり、その中にこの塔と9の宝暦元年の如意輪観音変形型の「子安大明神」塔が並んで安置され、祠の前には女陰石などの丸石が並べてある。

神社の参道階段下には酒々井町文化財の双体道祖神を含め、石祠や丸石があり、子安信仰との関連を示している。



酒々井町尾上住吉神社境内の「子安大明神」像
左は9(宝暦元年)、右は2(享保18年)

3

栄町西霊園の元文五年(一七四〇)「子安観音」塔

元慈眼庵跡の墓地入口にあり、大切に祀られていたよう保存状態が良い。正面向きの引き締まった姿は、金剛界大日

如来像を
思わせる。

銘は「奉供
養子安観
音諸願成
就」、旧布
鎌村の「西
新田同行
八十二人」
により建
立されている。

ここには先行して六臂と元禄期の二臂の如意輪観音像がある。旧布鎌村は江戸時代中期の正面向きで二児を伴う子安像塔が多く、また「犬供養」の民俗事例も現在まで盛んな地域である。



3 栄町西霊園の
元文5年子安観音塔

4

酒々井町柏木新光寺墓地の元文五年（一七四〇）女人講石

祠
石祠の中に小さな丸彫りの子安像があり、石祠横に「元文五庚申十一月吉田村中善女」と刻まれている。子安像は正面向き両手で乳児を抱き、子は右胸の乳を吸いながら右手で左乳首をつかむ。左肩には背から幼児が左手を



4 酒々井町柏木の石祠内の
丸彫り子安像（元文5年）

前に出して抱きついている家庭的ではほえましい像容である。

新光寺は、元は岩橋山大仏頂寺末寺であった。現在は廃寺であるが、室町後半から桃山期に制作された木造童子像（酒々井町文化財）を祀る堂が残り、墓地にはこの子安塔のほか、元禄四年と享保十四年の如意輪観音像十九夜塔がある。この像容のルーツに関しては、**五、(1)**で紹介する。

5

小見川町虫幡日向山薬師堂の元文六年（一七四一）「八日講」塔

日向山薬師堂横の8基の供養塔群中にある。銘文は「奉待八日講中 西友村 元文六年辛酉三月吉日 同行廿六人」。塔群の中央に貞享四年（一六八七）の胎藏界大日如来像、他に3基の子安像塔と聖観音像念仏塔などが並ぶ。如意輪観音像はない。

中央の大日如来像には「奉修日記夜待二世安楽処 虫幡村 辻下西共 信善女人道行九人」と銘記され、女人の日記念仏講による建立である。

元文六年の子安像塔に刻まれた「八日講」とは大日如来を祀る湯殿山信仰に関わる講と思われ、子安像塔4基は、正面向きで大日如来像に近い像容



小見川町虫幡日向山薬師堂の供養塔群
左は5の元文6年、子安像中央は大日如来像

である。

6 酒々井町下岩橋大仏頂寺の延享元年（一七四四）石祠

4 の子安像から肩の子を省略した像を浮彫にする。

7 銚子市高神東町 賢徳寺の延享二年（一七四五）「子安観
音」塔

太い光輪を配し、未開敷蓮華を持つ聖観音像に子を抱かせた立像で、子の像上部が失われている。

8 蓮沼村蓮沼殿下子安神社の延享五年（一七四八）子安塔
損傷しているが、年号は読める。正面を向き、右手で子を
抱き、左手は膝に置く。蓮沼には子安神社と称する小祠が各
集落にある。

9 酒々井町尾上 住吉神社の宝暦元年（一七五一）「子安大
明神」塔

2 の横に安置。右手は如意輪観音の思惟相で、宝珠を持つ
ように左手で子を抱く。

10 成田市水掛 墓地の宝暦二年（一七五二）「十九夜」塔

正面を向き右胸元で宝珠らしきものを持ち、左手で子を支
える。下部は埋没しているが坐像である。頭部の三角頭巾の
ような宝冠の特徴は、土浦市栗野惣持院の明和三年（一七六
六）の立像をはじめ同市の手野でも2基ある。

11 酒々井町酒々井 朝日神社の宝暦四年（一七五四）「子安
講」塔

如意輪観音が思惟相のまま子を抱く。肩にも子の顔が浮彫
りされ、柏木の新光寺墓地の石祠像の二児を伴う特徴も表現
されている。寛政六年（一七九四）の思惟相で未敷蓮華を持
ち天衣を翻した変型如意輪像と共に祀られている。

12 成田市松崎 富宮神社の宝暦十二年（一七六二）「子安大
明神」石祠

石祠に思惟相の子安像が浮彫されている。

13 下総町高 台十字路の明和元年（一七六四）月待ち塔

「奉造／十三夜／十七夜／十九夜／講中善女人為二世安
楽」銘の供養塔。二児を配し、火炎宝珠のある円形光輪、肩
にかかる子の表情も豊かに表現されたふくよかな大型の像
である。交通の要衝にあり、利根川べりの栄町・成田市の光
背型二児子安像の原形となったと思われる。延享三年（一七
四六）の如意輪観音像十九夜塔も共に祀られている。

14 印旛村平賀 観音堂の明和元年（一七六四）子安塔

15 印旛村平賀 不動堂の明和元年（一七六四）「念仏講」塔

右の二基は如意輪観音が思惟相のまま、左手で子を支える
ほぼ同一の像容で、隣り合わせた集落の講が一カ月違いで建
立している。観音堂には寛文十年（一六七二）の六臂如意輪
観音像十九夜塔が残され、不動堂には小祠に丸彫りの子安像
が祀られている。

そのほかの著名な子安像塔と注目される事例を紹介する。

31 栄町押付善勝庵

の安永八年（一七
七九）十九夜塔

『女人哀歓』*2 71
頁に「奉待十九夜と
あるもの」として写
真が載っている。胸
と肩に二人の子が
いるタイプで、栄町



31 栄町押付善勝庵の
安永8年十九夜塔

には同様な二児を配した子安像塔が、18・19の安永三年（一七七四）と58の寛政二年（一七九〇）、後期に入って天保二年（一八三二）と天保三年（一八三三）の計6基ある。

32

船橋市米ヶ崎 無量寺の安永八年（一七七九）十九夜塔
中期では北総最西端の子安像塔。元禄六年（一六九三）の如意輪観音像十九夜塔と共に現在は無縁塚に移されている。如意輪観音変形像で、右手は思惟相のまま、左手に布に包まれた赤子を抱く。宝珠のような子の表現が独特で、地理的にも酒々井町・印旛村の如意輪観音変形像との結びつきはなく、独自に月待塔の如意輪観音像の像容から創出されたかと思われる。

35

千葉市星久喜町千手院の安永九年（一七八〇）子安像塔
平岩毅氏が「氣品に満ちた精巧な逸品」と『房総の石仏百選』*8で紹介されている「子安観世音」像。右手に未敷蓮華を持ち、左手の抱いた子を見る。

38

成田市北須賀白旗神社の天明二年（一七八二）十九夜塔
印旛沼の甚平渡しに近く、利根川縁と印旛沼周辺の町村を結ぶ要衝に位置する勝福寺の境内に隣接して、その右奥の山上に白幡神社があり、その横に簡単な覆屋の末社子安神社がある。子安神社の中には、左に天明八年（一七八八）の如意輪観音の十九夜塔、中央に「子安神社奉射謹言」のお札を納めた無銘の石祠があり、その右隣にこの子安像塔が祀られている。

像容は右胸と左肩に二児を配し、18と31の栄町の子安像塔に類似する。この塔が如意輪観音像と石祠と共に並ぶ姿は、北総の子安祭祀が神仏混淆の信仰形態であることを象徴する。



成田市北須賀白旗神社内の子安神社

右：38 天明2年十九夜塔

67

佐倉市鏑木周徳院の寛政六年（一七九四）子安像塔
榎本氏が『日本の石仏』の「北総の子安塔とその背景」*3で紹介されている。周徳院近くの薬師堂のあり、火災で周徳院に移され、通称「子育て地蔵」として「鏑木の女たちから信仰されてきた」子安観音とのこと。この像容は、83 佐倉市大蛇町 神明神社の享和元年（一八〇二）像に受け継がれている。

84

八千代市島田の享和元年（一八〇二）「子安釈迦」像
島田の子安神社には、元文二年（一七三七）「妙法子安釈迦仏 島田村講中」銘の合掌した舟型光背の釈迦如来立像塔と、寛政九年（一七九七）「子安大明神」銘の文字碑と並ん



八千代市島田の子安神社 左：83 享和元年「子安釈迦」像
中央：「子安大明神」碑、右：元文2年の「子安釈迦」像

で、享和元年「妙法 子安釈迦仏 当村講中」銘の立像塔が安置されている。

享和元年塔の立像は、右手を立て左手に子を抱く像容で、頭髪や衣は銘文の通り、如来像を表現している。

島田は島田台・佐山など八千代市北西部の中世からの日蓮宗地域にある。この地域は密教系の地域とは異なり、「子安観音」の主尊名を避けた「子安大明神」や「子安鬼子母神」銘の子安像塔はいくつかあるが、この「子安

釈迦」銘は千葉県下でも珍しい。^{*22} 八千代市では、「子安大明神」の文字のみで子安像のない石祠が、北総でもいち早く元禄一六年（一七〇三）に上高野子安神社に登場し、石碑・石祠は中期までで市域10基を数える。（表2-3・2-4）

印西市や白井市と同じく八千代市の真言宗地域では、十九夜塔の如意輪観音像の造立が盛んであるが、むしろこの地域での「子安観音」像の出現は遅く、後期の文化十一年（一八一六）米本の林照院の子安像塔が初出となる。

この島田の子安神社の小祠には、勢至菩薩に似た合掌型の釈迦像から「子安大明神」石碑へ、そして「子安釈迦」像へ

と、ムラの女人講の子安像塔を生み出す試行錯誤の過程が残されているといえる。

四、子安塔像出現期の像容の特徴と系譜

子安像塔の北総での最も早い出現は、1の野田市の正徳四年銘があるが、個人による造立の墓標仏であることから例外的であり、これについては次の五、(2)の項で考察したい。

地域の講による子安塔像は、2の酒々井町尾上神社の享保十八年「子安大明神」立像が初現となり、その七年後の元文五、六年には、同じく酒々井町で子安像石祠4が、そして、酒々井町から北上した利根川沿いの栄町で3の「子安観音」像、さらに東方下流の小見川町で「八日講」の子安像塔5が相次いで現れる。

(1) 二児を配した子安像石祠の系譜

4の酒々井町の子安像石祠は、二児を配した子安像であることと、石祠であることの2つの珍しい特徴を持つ。この北総江戸中期の子安像塔の特徴は、表2-8のように、二児がいる子安像12基、石祠型8基を数え、それぞれ特異な要素となっている。

地域的には、二児を配する像容は酒々井町から、佐倉市を経て、光背型になって下総町・成田市に伝播し、栄町では中期後期の子安像の特徴点となる。

また子安像を浮彫した石祠は、ムラの産土神社境内の子安神社に子安大明神として今も大切に祀られていて、中期では酒々井町・成田市・佐倉市・千葉市で、後期では印西市・船橋市・白井市でその姿を見ることが出来る。酒々井町から派生するこれらの子安像塔は、神社内に祀られていることや、石祠の形態、「子安大明神」銘など神社祭祀的な傾向が強い。

この元となった石祠内二児像4の像容のルーツについては、

五、の(1)で述べたい。

(2) 思惟相型の如意輪変形像

酒々井町域は、さまざまな像容の子安像が模索・試作されたところである。如意輪観音像の思惟相の右手のスタイルをそのままに、左手に子を抱かせた子安像塔が創造されたのも酒々井町の尾上住吉神社であった。18世紀年代初めのころは、如意輪観音像が月待塔の主尊として多造されるので、各地でその変形像が現れても不思議ではないと思うが、意外にもこの9の尾上住吉神社「子安大明神」像が最初である。

その後、富里市・船橋市にもその事例がみられるが、思惟相型の如意輪変形像は、同時に二児がいる像や石祠内の子安像の思惟相のものも含めて12基であり、船橋市の事例を除き、酒々井町からの伝播の過程が類推できる。船橋市の32の十九夜塔は、独自に如意輪観音像から生み出された可能性を否定できない。44の船橋市金堀の子安像塔は、思惟相の頸の傾きが浅く直立に近い。如意輪観音像の傾けた頸が18世紀終わりごろから立ってきて後期には直立する傾向に並行していると思われる。

(3) 横向きに傾斜した像容

(2)の如意輪変形像の首を立膝側に傾けた姿勢は、頬に当てた右手を腹部に回して両手で子を抱き抱え、視線を子の方に向けることで、慈愛の表現がより強くなる。

29の安永七年(一七七八)千葉市大宮安楽寺の石祠内の子安像は思惟相の上体の傾斜が残る如意輪変形像で、右立ち膝の斜めのラインと上体の斜めのラインが平行する。子を懐に入れ、右へ傾斜したこの姿勢は、70の石祠内の子安像のほか、48の千葉市且谷町と59・64・73・75の光背型へ継承され、千葉市市域の像容の特徴となり、八千代市米本の林照院など後期の像容に継承されていく。

逆に立膝の反対の左側に上体が傾斜した姿勢は23の安永五年(一七七六)の印旛村の例に始まり、37・43・50・67・83に見られる。

24・35の千葉市の子安塔は左向きの姿勢をとるが右足を立膝しない。右手に蓮華持つ35の像容は聖観音像系と考えたい。

(4) 正面を向いた子安像塔

酒々井町で子安像塔が生まれたころ、利根川南岸の栄町と小見川のムラの小さな仏堂境内などでは、月待塔に正面を向いた子安像が生み出される。その威厳ある姿は如意輪観音像より大日如来像に近い。

その後、下総町や栄町では、この正面向きの母像に二児が戯れる子安像が現れてくる。また小見川町や隣接した佐原町、神埼町の母子像は、膝に抱かれた子が正面向きで蓮華を持ち、あるいは合掌するなど子の姿にも変化が現れ、やがて後期の文化文政期の複雑な像容へと変化していく。

(5) 蓮華を持つ子安像塔

月待塔では、如意輪観音像を主尊とする十九夜塔が圧倒的に多い³が、銚子市・佐原市・成田市など東総では、江戸時代前期から中期の初めにかけて、十五夜待・十七夜待などの銘文と共に聖観音像や地藏菩薩、勢至菩薩、大日如来像を主尊とする月待塔もみられる。(『東総の石仏』⁷では「銚子市の月待塔193基中176基が如意輪観音」という。)

銚子市では、7や21のような蓮華を持った聖観音菩薩に子を抱かせた像が早くから登場する。特に蓮華を持つ像容は後期になると北総の子安像塔の主流となり、子を抱かない十九夜塔の如意輪観音像も蓮華を持つようになる。また25・45のような勢至菩薩立像に子を抱かせた像容の子安像塔も見られるが、その数は少ない。

(6) 江戸中期の北総の子安像塔の集計

江戸中期の北総の子安像塔について、市町村別とその時代的な推移、像容と形態の特徴、立地、銘文による主尊名・造立主体・目的などを集計し、表2-6～2-10、図3～4に示した。

(7) 江戸中期の北総の子安像塔像容の系統図

以上の観点から、江戸時代中期の北総における子安像塔の出現とその後の系譜については、図5にまとめた。

五、北総の子安像塔出現期をめぐる課題

(1) 4の酒々井町柏木の元文五年石祠のルーツは、袖ヶ浦市百目木の元禄四年銘石祠

1・2・3の子安像塔の像容に関して、そのはつきりした由来を示すことができないが、4の酒々井町柏木の元文五年石祠については、袖ヶ浦市百目木の子安神社の元禄四年銘（一六九一）の「子安大明神」石祠型子安像塔（表1と図1の*0）がそのルーツであると確認できる。

袖ヶ浦郷土博物館
野外展示の模造石造物の中に、「元禄四年（一六九一）」銘の石祠内に子安像を刻んだ百目木の子安像塔の複製がある。
この原品について袖ヶ浦市教育委員会に



袖ヶ浦市百目木の子安神社 元禄4年銘石祠

問い合わせ、百目木の区長さんのご案内で実物を拝観、その由来などをお聞きすることができた。

石祠内に浮き彫りされた正面向きの子安像には胸と右肩に二児がいて、「子安大明神」の銘と、観世音をあらわす「サ」の梵字が彫られてある。石祠に二児がいるその像容は特異であり、百目木と酒々井町柏木を結ぶ系譜は明らかであるといつてよいであろう。以前は、近くの山の中の子安神社にあり、三月十四日の縁日には、露店もでてにぎわったという。周辺には字名や屋号に「子安」の名も残っていて、安産の願掛けの底抜け巾着も奉納されている。子安講の際にかけた御絵様の掛け軸3本も残されていた。

また祭壇には、白磁の三尊形式の慈母観音像も共に祀られていた。いつから一緒に置かれたか、定かではないが、このような白磁の慈母観音像について、若桑みどりは、当時の中国での地域文化への適応を推し進めたイエズス会宣教師マテオ・リッチが作らせた「東アジア型聖母像」であり、この白磁像が、海商鄭父子によって福建省から長崎に運ばれ、潜伏キリシタンの霊的需要を満たしたと、その著『聖母像の到来』*9で述べている。中国の送子観音像と白衣観音像を元に造られたこの「東洋の聖母」像が17世紀半ば、「仏像」として大量に輸入されたことは、子安像の成立の背景として無視できないであろう。

同様な像は、小美玉市の文化財「子安観音像」があり、明朝（中国）より伝来した白磁製のマリア観音像で秘仏とされている。宝永年間（一七〇四～一七一〇年）ひとりの信者が長崎において霊夢を蒙り、授けられた観音像と伝えられ、もと、竹原中郷天台宗永福寺末長福寺境内にあったものであるという。*45

(2) 個人による供養塔、墓塔をめぐる

表1の92件の北総江戸中期の子安像塔には、ムラの講ではな

く個人によって建てられた供養塔 4基を含んでいる。1・16・39・59の墓塔とみられる石塔で戒名があり、あるいは複数の年号がある。

1と39は野田市の所在で、ともに石田年子氏の情報により実見した。39の野田市船形下の今泉不動堂墓地の子安像塔は、宝暦六年（一七五六）と天明二年（一七八二）の二つ年号のある上部の欠けた思惟相の如意輪観音変形像である。

子安像塔は、旧下総国でも江戸川べりの地域にはない。各市区町村の調査報告を見ても、江戸川区・葛飾区・市川市・浦安市・流山市・野田市・旧関宿町、そして松戸市西部では近代でも講による建立はなく、石田年子氏の墓標仏発見の情報は、驚きであった。

個人による供養塔は、講という集団の総意によらずに個人の意志と財力で像容を選択できることから、斬新な像容の石塔が建てられる可能性があり、そのような事例は、江戸川上流の埼玉県にもある。旧浦和市の大間木字附島の旧家の墓地には、女性2人の戒名、命日と思われる明和四年（一七六七）と五年（一七六八）の複数の年号銘と「ありがたき法の誓いもつきしまに子安大悲のあらむ限りは」という和歌が彫られた角柱型台座の上に、見事な丸彫りの子安像を載せた墓塔がある。また著名な秩父金昌寺の慈母観音像は、寛政四年（一七九二）の寄進で、喜多川歌麿の絵から範をとったとされ、江戸の吉野家半左衛門が先祖近親供養の主旨で造らせたと言われている。

そのほか印旛村には、上部の欠けた子安像をのせた16の鎌苅東祥寺供養塔がある。角柱型の台座には「明和五戊子年」（一七六八）「奉読誦千部普門品供養」とあり寄進者の複数の名と女性の戒名が刻まれている。東祥寺には女人講による石塔が17基あるが、中期の年号銘がある子安像塔は、この供養塔だけである。

千葉市では、59の高品等覚寺墓地の子安像墓塔のほか、武石の真蔵院墓地に後期の文化四年（一八〇七）銘の墓塔を見つけた。共に千葉市域に流行した48の且谷町像の系譜を引く像容である。

個人の墓塔は自治体などの調査では、対象外であり、今後調査対象を広げることで新しい発見があるかもしれないが、故人供養塔の造立年については、故人の年忌法要で建てられることから、記されている命日と建塔の年月日は一般的に異なることも多く、像容の編年に際しては要注意である。

(3) 「初出」と確認できなかった過去のデータ
子安像の初出に関する既報告のデータで、年号銘の読みや像容の誤認があったらしく、初出と確認できなかった事例があった。

① 銚子市の「元禄三年子安観音」像

『千葉県石造文化財調査報告』*10に「元禄三年」（一六九〇）の初出として報告されている銚子市若宮町東岸寺の子安塔は、千葉県中央博物館所蔵の手書きの昭和53年調査カード*46には「文禄三〇正月吉日」と記載されている。調査カードの写真を参考に、二〇〇九年九月現地を確認すると、この石塔は、軟質の凝灰岩



銚子市東岸寺の子安塔

製（調査カードでは「佐久石」）で調査当時より一層風化崩壊が進んでいたが、銘文は「文」の字のみ判読が可能であった。また形状や石材の質から、江戸時代後期の作と思われる。おそらく当時の調査で「文化三」または「文政三」を「文禄三」と誤って記載したカードから、報告書作成の際、活字で「元禄三」と表記してしまったと思われる。

「元禄三年の銚子市の子安観音」という『県報告』*10のデータは、『千葉市文化財調査報告』*11や『船橋市の石造文化財』*13に、千葉県の子安観音の最古例として記述されている。

② 我孫子市江蔵地青年館の「享保三年の十九夜塔」

我孫子市江蔵地青年館の享保三年（一七一八）銘十九夜塔は、『女人哀歎・利根川べりの女人信仰』*2で「子安観音の原型」と記され、榎本正三氏は「子安観音の像容の起源として、利根川下流域を中心に、如意輪観音像を刻む十九夜塔が盛んに建てられる中で、子を抱く如意輪観音の姿が創りだされる」と述べ、『房総の石仏百選』*8、平岩毅氏もこの塔が「（千葉）県内最古」で「（子安）観音の発祥地を暗示する」と述べておられる。

また印西市教育委員会発行の『石との語り』*18でも

「如意輪観音からの変容」の例として紹介されている。

この十九夜塔を二〇〇九年六月、現地を確認すると子安観音ではなく、未敷蓮華を持つ思



我孫子市江蔵地青年館
享保3年 十九夜塔

惟相の如意輪観音像であった。この如意輪観音像が子安像塔と誤認され流布した元は、『我孫子市史資料 金石文篇「石造物」*14に、写真入りで載っている「如意輪観音・十九夜塔」の「（如意輪観音浮彫）」の下に小さなポイントで「*赤子を抱く。」と記載されていることに由来するのではないかと思われる。おそらく調査者が未敷蓮華についての疑問点として書いたメモが、報告書でも追記されてしまったのであろう。

六、子安像塔の像容についてまとめと考察

(1) 北総の女人講による子安像塔は、享保十八年（一七三三）から元文六年（一七四一）に酒々井町・栄町・小見川町で、それぞれ創出されたと推測される。

(2) 酒々井町で二番目に作られた元文元年（一七四〇）柏木の子安像塔4は、石祠の形態と二児を配する像容の二つの特徴点から、その淵源を袖ヶ浦市元禄四年銘の「子安大明神」石祠*0に求めることができる。

(3) (2)の酒々井町柏木の像の二つの特徴点は、周辺の子安像塔に継承され、また一部は光背型石仏と習合して、栄町の中期末期の像容に発展する。

(4) 光背型の栄町の3と小見川町の5は、正面を向く大日如来像に立膝をした如意輪像の特徴を加味した仏像で、また延享二年（一七四五）銚子市の7は聖観音像を基にした子抱き像である。この像容は中期の光背型子安像塔の基本形となり、後期へ続く。

(5) 二臂如意輪観音像からの変形像は、(2)の二児のいる石祠型より遅れ、宝暦元年（一七五一）の酒々井町9が最初である。上体が傾斜した姿勢は、その後の子安像塔に受け継がれていく

が、右手が思惟相のままの子安像塔は、中期に造られた如意輪観音像月待塔の彫しい数に比べると意外に少ない。

(6) 中期の子安像塔の分布は、酒々井町を中心に印旛村・成田市と佐倉市・千葉市に広がる印旛沼東岸の分布圏と、小見川町・銚子市・栄町を核にした利根川沿いの二つの分布圏がある。

印旛沼西岸及び、利根川沿いの我孫子市以西の中期の子安像塔は極めて少ない。北総の西端は船橋市で、野田市の墓標仏を例外とすると江戸川流域は分布圏外となる。また十九夜講の如意輪観音像の造立が濃密な地域や、子安神の銘文のある石祠が多い地域は、子安像塔の普及がむしろ遅い傾向にある。

(7) 中期の子安像塔は、同時代の他の石造物と同様に安山岩系の硬質の石材を用い、多造される後期や近代に比べて加工技術も優れていて、地域で大切に継承されている。銘文は、54は台座、68が側面に刻まれているのを除き、すべて表面に刻まれている。

(8) 子安像塔が18世紀中葉に北総各所で創出された背景として、「念仏・二世安楽の刻銘が十九夜塔などに変わっていく時期」*3であることは榎本氏の洞察の通りであるが、一方、古来のからのムラの「子安神」信仰も酒々井町を源とする子安像塔創出の大きな要因であると筆者は考えている。

(9) 北総の子安像塔は、後期の文化文政期に八千代市以西にも普及し、近代になると印旛沼周辺の地域で数多く建てられる。その理由として、農家を中心に家産と家系を継承するため、跡継ぎを産み育てることが必須とされていく社会的な背景があったことが考えられると思う。

おわりに

私の子安像塔を調べ始めたきっかけは、平成14年11月に八千代市立郷土博物館で房総石造文化財研究会の沖本博会長「房総石仏百選から 野の石仏」と題したご講演で八千代市の子安信仰石造物について拝聴したことでした。その後、榎本正三氏のご講演や著書に接し、また千葉県立中央博物館の石造物調査リストを電子データでいただいたことも調査を拡げる手になりました。

その後も貴重な情報を寄せてくださる沖本博・石田年子氏、千葉県中央博物館所蔵の調査カード閲覧にお力添え頂いた白井豊氏ほか、房総石造文化財研究会の皆様には厚く御礼申し上げます。子安像塔が本格的に北総に普及していく江戸時代後期以降の展開については、また別の機会に調査結果をまとめたいと思っています。今後ともご教授のほどよろしくお願い申し上げます。

参考文献 (文中 * の番号)

著書・論文

- 1 平岩毅「下総の子安信仰・石造品分布」『会報24号』房総石造文化財研究会 昭和60年
- 2 榎本正三『女人哀歎—利根川べりの女人信仰』崙書房 平成4年
- 3 榎本正三「北総の子安塔とその背景」『日本の石仏』66号 日本石仏協会編 平成5年
- 4 田村右品「近世下野の子安像塔」『日本の石仏』66号
- 5 光野志のぶ「茨城県の子安観音(Ⅰ)」『日本の石仏』66号
- 6 小林剛三「郡山地方の子安信仰塔」『日本の石仏』66号
- 7 服部重蔵『東総の石仏』言叢社 昭和61年
- 8 房総石造文化財研究会『房総の石仏百選』たけしま出版 平成11年

- 9 若桑みどり『聖母像の到来』青土社 平成20年
- 自治体などによる石造物調査報告書
- 10 『千葉県石造文化財調査報告』千葉県 昭和55年
- 11 『千葉市文化財調査報告第5集』千葉市 昭和56年
- 12 『船橋地区石造物調査報告(前篇)』船橋市史談会
昭和53年
- 13 『船橋市の石造文化財(市史資料)』船橋市 昭和59年
- 14 『我孫子市史資料 金石文編』石造物』我孫子市
昭和54年
- 15 『栄町の地蔵・観音』栄町文化財シリーズ第二集 昭和63年
- 16 『白井町石造物調査報告②③④』白井町
昭和62～平成1年
- 17 『印西市石造物第一～八集』印西市 昭和54～平成3年
- 18 『石との語らい』印西市教育委員会 平成4年
- 19 『柏の金石文(1)』柏市 平成8年
- 20 『沼南町史 金石文(一～三)』沼南町
平成4年～平成9年
- 21 『下総町石造物目録』下総町 平成18年
- 22 『八千代市の歴史 近代・現代』石造文化財』八千代市
平成18年
- 23 『小見川の石造物(西地区編)』小見川史談会 平成21年
- 24 『四街道市の文化財 23号』四街道市 平成9年
- 25 『松戸市内石造物文化財調査概報Ⅰ～Ⅲ』松戸市
昭和61～62年
- 26 『富里の石造文化財』富里村 昭和56年
- 27 『鎌ヶ谷市資料編Ⅱ金石文』鎌ヶ谷市 昭和61年
- 28 『鎌ヶ谷の民間信仰』鎌ヶ谷市郷土資料館調査報告書Ⅲ
平成5年
- 29 『海上町の石造文化財』海上町 昭和61年増補版
- 30 『石造物シリーズⅢ』松尾町 平成2年
- 31 『芝山町石造文化財調査報告』芝山町 昭和57年
- 32 『神崎町史資料集金石文等』神崎町平成3年
- 33 『関宿町の石物』関宿町文化財調査報告第一集 昭和58年
- 34 『民間信仰を中心とする野田市金石調査資料集』野田市
昭和42年
- 35 『流山市の石仏』流山市立博物館 昭和62年
- 36 『流山市金石文記録集(上・下)』流山市 昭和48年
- 37 『市川市の石造物』市川市石造文化財調査報告書 平成21年
- 電子データ(白井豊・吉村光敏・沖本博・吉田文夫・西岡宣夫・
木村雅夫・佐野正行・木村穂高・石田年子各氏により調査、
入力された excel 表リスト)
- 38 『成田市・佐倉市・四街道市・八街市・習志野市5市データ』
昭和63年～平成4年調査
- 39 『印旛村石造物一覧表(種類別)』平成18年7月30日作成
- 40 『印旛郡酒々井町の石造物調査結果』平成10年3月31日
- 41 『佐原市石造物目録』平成18年1月24日作成
- 42 『千葉市の子安・十九夜塔一覧』平成22年6月20日作成
- ホームページ
- 43 海上町バーチャル資料館 石造文化財』旧海上町
- 44 『東庄町第6回調査記録』『東庄町第7回調査記録』
房総石造文化財研究会
- 45 『文化財一覧(美野里エリア1)』小美玉市ウェブサイト
手書きの調査資料
- 46 千葉県中央博物館所蔵『石造文化財調査カード』銚子市・神
埼町・栗源町・佐原市・蓮沼村・横芝町・本埜村・小見川町